意訳・

板倉勝明著「同宗松山侯に贈る書」

意訳　淡 路 博 和

はじめに

この文章（原漢文）は、学者大名として名高い安中藩主板倉勝明（文化六年〜安政四年）が、備中松山藩（高梁藩ともいう）の藩主板倉勝静（文政六年〜明治二二年）に送った書簡です。おそらく活字にはなっておらず、ここでは筆写本（小野 直遺文書）を参考にしました。

同宗とは同族・同姓という意味です。松山藩主の板倉家は板倉一族の本家にあたり、現在の岡山県高梁市にありました。過ぎし日に勝静からいただいた書状に対する返書として、勝明が認めた文章です。書かれた時は、安政二年三月ですから、「遠足」実施のため安中に来る二か月前のことです。文中で勝明は「近年、手足の痺れが、春以来ますます甚だしくなり、いつも気持ちが晴れません。」と記していますが、その二年後に、四七歳五か月の生涯を閉じたのです。

一方、勝静は勝明より十三歳の後輩にあたりますが、譜代板倉本家の藩主として、幕府の寺社奉行から奏者番となり、文久二年からは老中を兼任いたしました。維新時には謹慎の意を表していましたが、薩長軍により宇都宮英厳寺に幽閉されました。ところが大島圭介に救われて会津へ、さらに榎本武揚の率いる函館へと移りました。しかし、明治二年四月、五稜郭の開城に先立って、そこを脱出し東京にもどりましたが、反政府の罪を問われて禁固刑となり、勝静とその子勝全は、安中藩邸に預けられたのです。やがて明治五年正月、許されて国元へ帰り、松叟と号して世事を絶っていましたが、明治九年に東照宮の祠官となり、明治二二年、六七歳の波乱の生涯を閉じました。

この文章の末尾に、「伏して希うことは、国の為にどのような場合にも、必ず自ら嗇み（自重）なされよ。」と勝明は忠告しています。幕末維新期の政治的な激動と、勝

静の波乱の歩みを顧みると、勝明の心配もあながち無意味な杞憂でなかったことと思われるのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

板倉勝明著 「同宗松山侯に贈る書」　　意訳

乙卯三月（安政二年）

過日はお手紙をいただき、お元気なご様子を承り、とてもうれしく安心致しました。お手紙によりますと、侯（高梁藩主板倉勝静）が国家を憂い、領民を愛しむ情愛が、ますます厚くいよいよ切なることを知り、感嘆してやむことはありません。

僕（板倉勝明）は、たまたま部屋の簾の中で尺牘（書状）を一通見つけました。現在の若年寄泉侯（陸奥国泉藩主本多越中守忠徳・一万五千石、福島県いわき市泉町）が奏者番であった時、僕は大坂加番で大坂城に滞在中でしたが、そこへ贈っていただいた書状です。文の大意は、熱官（熱心に働く役人）を当世には求めない、小さなことでも良い策を小さな村に施したいとのことでした。

あの加番の時から数えて十余年が経ちました。中国の諺にもあるよに、年の流れは速く「白駒の隙を過ぐるが如し」（「如白駒之過隙」、時の流れは瞬時であるとの譬）の感が致します。この間、僕は封民（領民）に恒産を持たせられませんでした。羞ずかしさに堪えられません。窃かに聞くところによると、我兄（勝静）は家督を継ぎ、藩主になって僅かに七年。ところが家臣たちは喜んで従い、膏沢（恩沢を施し恵むこと）は細民（貧民）にも及んでいるとのことです。まことに幸いなことです。僕（勝明）は近頃、手足の痺れが、春以来ますます甚だしくなり、いつも気持ちが晴れません。

この頃、閣老（幕府の老中）始め有力者たちは台諭（将軍の諭）を蒙って、しばしば江戸近郊を試馭する（乗馬を試みる）とのことを聞きました。これは実に特別な命令から出たことです。僕はこれを聞いて大いに喜び、自分の

宿痾（宿病）も忘れるようでした。

そこで、二月廿三日を卜して、夜明け方、僕は馬に乗って王子の瀧野川（東京都北区石神井川南岸の台地、江戸時代の紅葉の名所）を巡覧いたしました。廿七日には風雨を冒して深川の洲崎（江東区東陽一丁目から木場六丁目、元禄時代の埋め立て地で潮干狩りや遊覧の地）に至りました。海面を眺望すると、白浪は天に接し、品川の海の?臺（砲台）は点々と連なって島嶼（大小の島々）のようです。なんとも嘆かわしく思いました。本月朔日、また武州の玉川（多摩川）に遊びました。水辺の沙石（砂や石）は数十里もあり、あたかも碁石を敷き詰めたように見えます。また水は清潔で、纓（冠の緒）も洗いたいほどで、掬って飲めば、その冷たさが歯に沁み透りました。

ところで僕（勝明）の家に年老いた召使いの老婆がおります。今年で七十七歳、僕が七歳の時にはじめて我が家に来ました。それから四十一年も経ち、その孫や玄孫（やしゃご）は玉川・二子などの諸村に散在し、或る者は村長に、また或る者は漁夫になっています。そこで、二三の小舟を雇い、この辺で?繩と呼ばれる者が僕のために香魚（鮎）を捕ってくれました。溌剌として活きのよいのが網に入り、しばらくすると?　?（魚入れの籠）がいっぱいになりました。僕は携えてきた瓢酒（瓢箪の中の酒）を温め、これを傾け、香魚を炙って酒の肴にいたしました。その芳ばしい脂身は美味で譬ようもありません。

その他の光景は 家弟叔行（勝明の弟板倉勝殷）や侍臣（家来）が賦した詩に具に記されておりますから、併せてお慰みまでにご覧ください。初九日にはまた駒場（目黒区北端）の薬園に遊び、園吏植村某の宅に憩いました。その跡取りの婦人は、僕の季父（末の叔父）芝山氏の娘です。園中の竹筍（竹の子）と小鮮（魚の生肉）を烹て餉（食事）と致しました。大変美味しかった。食後、ゆっくりと園中を歩み、薬草凡そ数百種を観ました。植村某の三男はやっと十三歳ですが、僕のために順路を案内し、薬草の種類を暗知

（暗記）していて、私の問いに直ちに答えました。その記憶力には驚くのほかありません。

薬園を出て、行くこと二里ばかり、北沢村（世田谷区北部）に至りました。紫の藤一株があり、その枝を張る範囲はおおよそ百園(園？)もあり、蟠屈（屈曲）する様は、臥している龍のようです。蔓は三方に延び、それぞれには数十間にわたって架（たな）が設けてありますが、花はまだ全開していませんでした。その時、天が俄に陰ってきたので、すぐさま轡を促して村を出て、高井戸村（杉並区南部）に至りました。その頃には雷雨となり、着物の上下は沾湿（しっとりとぬれる）してしまい、帰宅した時には既に薄暮になっておりました。

文武は、車に両輪があるように、その一つを欠けば必ず用を果たすことは出来ないと言われています。ところが近頃、洋夷の猖獗（欧米勢力の近海への進出が盛んなこと）から、世の中の人たちは、天下は武事が最も大切だと考えるようになってきました。幕府でも、近郊を馬で駆けることの禁止を解きました。王侯牧伯（王や諸侯、身分の高い人たち）も攀龍（龍に縋ってよじ登ること、有力者に頼って立身出世すること）の枠を脱することが出来るかのようです。今や身体は筋骨堅剛になって、昔の？弱（虚弱）の比ではありません。

しかしながら、このように武事優先を最重要な務めとするならば、牧民経国（民を養い育て、国家を治めること）の観点からして、何か欠如していると言わざるを得ません。これもまた、僕が窃かに憂うる所なのです。僕自身の？陋（才学が浅く度量が狭い）を揣り（おしはかり）もしないで、稲葉正義（迂斎・江戸中期の漢学者）著「幼君補佐之心得」と頼惟完（春水・江戸後期の儒者、頼山陽の父）記述の「一志通恵」を、合わせて一冊子として刊行し、これを同志に頒布いたしました。頒布しました理由は、読者が文事をもって基本とし、武事は文事の羽翼（補佐）となすように、との考えからであります。文事を軽んずるような偏重

がなくなるようにとの願いからです。したがって、この冊子は単なる教養を補う一助にだけあるのではありません。高明な方たちがどう扱われるかは知りませんが、刊行しました書冊十余部と共に、この冊子を我兄（勝静）に差し上げます。

伏して思いますに、我兄（勝静）は、楽翁源公（白河楽翁、松平定信一七五八～一八二九・老中で寛政の改革者）の令孫（お孫さん）でしたが、松平家を出て、我が板倉家の宗家を継ぎました。板倉宗家は、遠くは長圓（板倉勝重・京都所司代）・松雲（板倉重宗・京都所司代）の両公が幕府に奉公した時の遺範（遺したお手本）を紹ぎ、近くは源公（松平定信）の補君の良い規範を襲いております。

我兄（勝静）が、何時の日か廟閣（幕府の老中）に登れば、膏沢（恩恵）は民に下り、人々はその徳を讃えるでしょう。天にいます三公（定信・勝重・重宗の三公）の霊もまた、陰ながら佑けてくれましょう。

僕（勝明）は窃かに我兄（勝静）に望むことがあります。それは、詩（詩大雅・文王の項）に「汝の祖を念い、その徳を聿脩（祖先の徳を述べ修めること）し、永く配命（天命に従い背かないこと）を言げて、自ら多福を求める（原文「永言配命　自求多福」）とあるように、我兄もまた旃を勉められよ。

僕は老懶（年老いて物事を行うのが億劫になること）ますます甚だしく、愚かで上手く立ち回れず、やがて草木と同じように朽ちていきます。しかし、そうは言っても、報国の一点では、老いたりと雖も益々意気壮ん、窮すと雖も益々信念は固く、敢えて他人には譲れないこともあります。ああ、時はこれ暄和燕鴻（暖かくなり、燕が来て鴻は帰る）、忽ち季節は換って草木は一新します。伏して希うことは、国の為にどのような場合にも、必ず自ら嗇み（自重）なされよ。不宣。　　（意訳終了）